

福井大学における学部・附属学校園のインクルーシブ教育共同研究の推進

北 典子

1. はじめに

福井大学の附属学園には、幼稚園1園、義務教育学校1校、特別支援学校1校がある。平成25年度から、附属学園・教育学部・教職大学院が一体として機能する実践的教員養成体制を構築し、三位一体教育改革を実現してきた。令和3年度には、新たに、全学組織である「総合教職開発本部」を設置した。

本組織は、「国際教職開発部」、「地域教職開発部」、「インクルーシブ教育部」から構成され、附属学園と大きくかかわるのが、インクルーシブ教育部門の活動である。本年度より、附属学校園(幼稚園と義務教育学校を指す)と教育学部や教職大学院の教員、さらには医学部の子どもの心の発達研究センターとも連携し、インクルーシブ教育共同研究の促進を図る。医学部と教育学部が連携し、附属学校園の幼稚園(3歳児)から義務教育学校9年生(15歳)に在籍する子どもと保護者に対して、長期にわたる支援や担任教員などへの支援を行い、インクルーシブ教育を推進する教員養成機能の充実を図ることを目指す。

2. 附属学校園(幼稚園・義務教育学校)の実践研究と共同研究の歩み

30年前、旧附属中学校では、教育学部教員との共同研究や連携プロジェクトが頻繁に展開され、附属学校教員の授業実践に大学教員が理論付けする「実践と理論の往還・融合」による充実した共同研究が確立されていた。附属学校教員は、「発意・構想・構築・遂行表現・省察」の探究サイクル理論に基づく探究的な協働学習・プロジェクト学習とそのカリキュラム開発に、教科と領域の双方から授業実践に取り組んでいる。

平成29年4月の義務教育学校開校後も、「発意・構想・構築・遂行表現・省察」探究サイクルを研究の柱に据え、「探究」「コラボレーション」「コミュニケーション」を大切にしながら継続研究を推進している。近年は、附属幼稚園でも、遊びのサイクルに「発意・構想・構築・遂行表現・省察」を取り入れ、幼児の能動的な探究活動を支援する実践を展開し、義務教育学校へとつなげている。振り返れば、附属学校園・教育学部・教職大学院は、密接に協働し、理論と実践の往還の実現に取り組んできた。

こうした長年の共同研究により、多様性が求められる現代社会において、「発意・構想・構築・遂行表現・省察」サイクルによるプロジェクト型の学習活動は、個別最適化した知識・技能の学習とコンピテンシー(資質・能力)を培う協働的な学びであるとの知見を得た。さらに、協働探究するプロジェクト学習は、子ども一人一人の能力を引き出すと共に、多様な個性や特性を持つ子どもが活かされる学び(遊び)であり、グローバル・インクルージョン教育と最も相性の良い組み合わせと捉えた。教育学部と附属学校園の共同研究を基盤とし、新たに医学部と連携した附属学校との共同研究を令和3年度より始めた。

3. インクルーシブ教育部門開設1年目の共同研究の概略

従来、附属学校園には、知的障害は少ないが対人関係を構築することが苦手だったり、関心の幅が狭

かったりする子どもたちが比較的多い現状がある。数年前より教職大学院教員が、附属学校園の気がかりな子を含めた学級内活動(遊び・授業参観)の見とり、保護者相談、担任との相談活動、子・教員の医療相談などに連携して携わっている。本教育部門の設置は、附属学校園におけるインクルージョンの実現により、附属学校の教員研修学校機能を発揮して通常教育におけるインクルーシブ教育の研究開発と普及を目指すことでもある。令和3年度より、附属学校園のインクルージョンの実現に向けて、大学教員(教育学部より特別支援教育・臨床心理学・障害児教育・発達障害を専門とする4名)や特別支援学校教員、子どもの心の発達研究センター教員2名が、専任並びに兼任として加わる共同研究体制が整った。

本教育部門の共同研究は、令和4年度の附属学校園入試の見直しから始まる。幼稚園・義務教育学校前期課程と後期課程の各一般入試枠とは別に、新たにギフテッド型発達障害児の特別入試枠(子どもの力を引き出す親子支援枠)を設置した。保護者の理解のもとに医学部・教育学部と連携して、附属幼稚園の3歳児から義務教育学校の9年生までの12年間のコフォート型の教育研究を進めていくためである。共同研究1年目の本年度は、附属学校園(幼稚園・前期課程・後期課程)の教員と大学教員が共に、以下の研究会を実施してきた。

・インクルーシブ教育学園研究会の実施

・・・学園全体でインクルージョンに関する研究会(4月済・3月)

・3校(幼稚園・前期課程・後期課程)別研究会の実施

- ① ギフテッド型発達障害児の特性を学ぶワーキンググループ会(5月、7月、9月、10月済)
- ② 子どもの心の発達研究センター教員を講師とする附属学校園教員対象のペアレントトレーニング研修の実施(11月～2月)

・特別枠入学試験委員会の実施

- ① 入園、前期課程・後期課程入試におけるギフテッド型発達障害児の特別入試枠(親子支援枠)に関する募集要項案の検討(5月～7月済)
- ② 各入試問題の検討(7月～10月済)
- ③ 入園・入試当日(令和3年11月13日)に大学教員6名が参加し、ギフテッド型発達障害児入試枠(親子支援枠)の子どもの観察実施

・保護者面談の実施(7月～2月)

初のギフテッド型発達障害児入試枠(親子支援枠)を実施するにあたり、専門性に秀でた大学教員や医師を含めたコミュニティが形成され、共同研究が推進されることに附属学校園教員も期待を寄せている。

ギフテッド型発達障害児入試枠(親子支援枠)の子どもに限らず、一般入試枠で入園・入学した子どもや保護者に対しても、幼児期からの継続的な診断と保護者支援を丁寧に重ねていく方針である。通常学級内で協働探究するプロジェクト学習を通して、全ての子どもたちの学びの自立化・個別最適化と協働的な学びの実現を目指す。

4. 今後の共同研究の見通し

令和4年度から本格的に、ギフテッド型発達障害児入試枠(親子支援枠)で入園・入学した子どもを含めた附属学校園と教育学部、医学部が連携した12年間のコフォート研究が開始される。教育学部・医学部・教職大学院が附属学校園との共同研究をさらに進展させるためには、学部教員が「附属のために」と

いう意識を持つことも大切である。今まで以上に、毎週、幼稚園や義務教育学校を訪れ、対象となる子どもたちの観察と共に、保育や義務教育学校の授業参観に携わることが求められる。それにより、大学教員と附属学校園の教員が協働できる機会が増え、大学と附属学校園の機能強化を図ることが期待できる。とは言え、事後の会議等は勤務時間以降が多く、附属学校園教員と学部教員の勤務時間の増加につながっている。今後は、それらを有効にコーディネートできる体制・組織が必要であると考えます。

(連合教職開発研究科教授・福井大学教育学部附属幼稚園長兼義務教育学校長)